



TITLE:

静脩 Vol. 9 No. 2 (1972.9) [全文]

AUTHOR(S):

---

CITATION:

静脩 Vol. 9 No. 2 (1972.9) [全文]. 静脩 1972, 9(2)

ISSUE DATE:

1972-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65947>

RIGHT:

## 史料の保存について

半 田 良 一

私は、専攻の関係上、日本近代史の中での山村経済社会の展開に関心をもち、機会をみつめては山村への研究資料の探訪を試みる。草深い僻地の村を初めて訪れ、数日間そこに腰をすえて旧家に史料を求め、あるいは古老の経験談に耳を傾ける楽しさは、この研究分野ならではの醍醐味と、常に感謝している。

さて私の研究生活もすでに四半世紀になるが、この間に山村の姿も住む人の気風も大きく変わった。生活はあらゆる面で機能化し、所得は確かに向上したが、それとともにかつてのゆとりが失われた。昭和20年代には、どこの山村へ行っても一次資料に事欠かなかった。その当時は、明治・大正の激動期を生き抜いてきた古老たちがまだ元気だったし、村役場にもまた県庁や営林局にも、古い記録や統計類が倉庫の奥深く大切に保存されていた。それらは、戦後の日本の社会が足並み揃えて経済成長の進行を始める前の、山村の昔ながらのゆとりの中に、愛蔵されていたわけである。

けれども歳月は、この種の史料を急テンポで散逸させてしまった。近代史の生証人たる古老たちが櫛の歯を引くように世を去ったのは是非もないが、農家の生活様式の変化の中で、先祖伝来の記録類への関心やそれを伝承しようとする熱意も、とみに薄れてきた。一方役場や県庁の場合も情報量が著増して、古い文書を保存するゆとりが、空間的にも狭まり気持の上でもなくなった。とりわけ、村役場が統合されたり県庁などが改築されたりするごとに、古い倉庫は毀され、機構整備の名のもとに文書の管理責任も分散されて、資料の散逸する例が多い。多くの庁舎で、20年前には、専用の倉庫の棚に書類綴りが堆くしかし整然と並んでいた。けれども10年前には、それらは什器類に混って片隅に雑然と投げ出されていた。そして最近訪れると、すでに庁舎は移り倉庫はなくなって、書類の消息を知る人もない有様である。研究の進展に応じ新しい学説を一次資料に溯って検証しようとしても、往時の資料はすでになく、うたた愛惜の念に駆られることが、頗る多い。

とはいえ、農山村社会の急速な近代化の中で、これら史料の保存の責任を村や県の関係者だけに押しつけることは所詮無理だろう。歳月を経、また研究が深化するとともに、この種史料の価値はますます高まりかつ普遍化するに相違ないが、その収集保存体制はまだ整っていない。現段階でその価値を認識し、弾力的に受容し、かつ公開性を保証しうる機関としては、さしあたり大学図書館が最適ではなかろうか。篤志家の蔵書が図書館へ一括収蔵される例は少なくないが、官庁関係文書の廃棄処分にさいして学術的見地から保存の要不要を点検して収納するシステムを、うまくつくりえないものだろうか。資料の収集整備には、個々の研究者の情報集めの努力が先行することは当然だが、手続上の問題などを勘案すると、その円滑な授受のためには、やはり図書館が直接の受け入れ主体になってほしいと思う。

あるいは専攻分野の立場に偏した過分の注文かもしれないが、需められるままに素懐の一端を述べた次第である。

(農学部教授・附属演習林長)

## 「サン＝シモン、フーリエ文庫」について

農学部教授 坂 本 慶 一

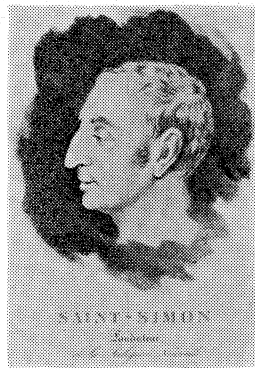
今般、サン＝シモンの著書・パンフレット類・研究書93部(148点)、同じくフーリエに関するもの54部(63点)、計147部(211点)が附属図書館に入り、「サン＝シモン、フーリエ文庫」(S.F. 文庫)と名づけられて、すでに整理を完了し、閲覧できる態勢にある。この文庫は、イタリアのフェルトリネツリ研究所長のデル・ボー氏が収集したものを、幸運にも京都大学が入手したものである。

アンリイ・サン＝シモン(1760～1825年)とシャルル・フーリエ(1772～1837年)は、ともに19世紀初頭に活躍したフランスの著名な社会思想家である。しかし一般に、特にわが国では、彼らの思想の独自性によるよりは、むしろマルクスとエンゲルスによって「空想的社会主義者」として批判された思想家として知られている。つまり彼らはあくまでマルクス主義のわき役と見なされてきたにすぎない。しかるに近年、教条主義的マルクス主義への批判の高まり、古典的諸理論によっては説明しきれない複雑・多彩な経済社会の動きなどがきっかけとなって、これまでないがしろにされてきた思想家に対する再評価の気運が生まれてきた。欧米諸国(フランス、ドイツ、イギリス、オランダ、ベルギー、イタリア、アメリカ、ソ連など)における「サン＝シモン復興」および「フーリエ復興」のきざしは、そうした世界的動向を反映するものである。事実、サン＝シモン(サン＝シモン派を含む)とフーリエに関する最近の研究には目覚ましいものがある。それらはいずれも、「空想的社会主義者」という固定観念によって一刀両断されてきた2人の巨大な頭脳の歴史的・現代的役割と意義を発揮し、再評価することを目指している。

若干、研究動向に立ち入ることになるが、サン＝シモンとフーリエの歴史的、現代的意義を問う場合、ごく大まかにいって、次のような研究課題が提起されてきたし、また提起されうるのであろう。

(1) サン＝シモンとフーリエは、マルクスの思想形成に対していかなる役割を果たしたかという、いわゆるマルクス主義の源泉に関する問題。また、マルクス主義に吸収されつくされていないサン＝シモンとフーリエの思想的独自性は何かという問題。これは非マルクス主義的社会主義の理論的基礎とその実現の可能性にかかわる問題を含んでいる。さらに、マルクス主義とのかかわりにおいて、そもそも科学にとってユートピアとは何か、両者は相互にどのように関係し合うかという、社会科学の方法論に関連する問題も重要である。

(2) サン＝シモンについては、この思想がコントの社会学、チエリーの実証史学の成立にいかなる役割を果たしたか、また19世紀のヨーロッパ諸国における社会思想や社会運動、特に社会的キリスト教、婦人解放運動、企業者の産業活動、生産者組合運動、芸術上の諸運動などに、どのような影響を与えたかということが問題となる。とりわけサン＝シモンが明確



サン＝シモンの肖像

(Allemagne, Henry Renéd :  
Les Saint-Simoniens 1827-1837.  
Paris, Gründ, 1930 より転載)

に予見した「産業社会」の特質と「産業者」の役割、ならびにそれらの未来的展望については、現代的観点から興味深い問題が提起される。

(3) フーリエについては、19世紀中ば以降の協同組合運動、労働運動、婦人解放運動、コミュニティ創設運動などに与えた直接的影響のほかに、次のような諸問題がクローズアップされてくる。宇宙論的スケールで展開されている独自の歴史観、フロイトに先立つ人間情念の心理学的分析、現代文明の産物としての人間疎外の実証的描写、農業技術論・食生活論・農業労働論をふまえた自主管理的農業コミュニケーション論、さらに労働と遊びの統合の理論や教育論・社会医学論・社会資本論の展開など、フーリエの提起する問題は目まがいとするほど多彩であり、着想の奇抜さは人の意表をつく。それらはいずれも現代社会の考察にあたって、なお新鮮で有効なヴィジョンを提供する。

ともあれ、「サン＝シモン、フーリエ文庫」は、今日では入手困難な多くの初版本によって構成されている貴重なコレクションである。この文庫が今後、京大関係者のみならず、広くわが国の各層の研究者の研究意欲を大いに刺激するであろうことは間違いない。フランス社会思想に関する系統的コレクションとしては、京大でも最初のものである本文庫が、さらに今後において、小樽商大の「手塚文庫」に匹敵する一大文庫として発展することを期待したい。なお、今年はフーリエ生誕200年に当たることを付記しておきたい。

## —— ニ ュ ー ス

### 教養部図書館の建設はじまる

早くから宿願となっていた教養部図書館の建設が決定され、さる8月10日に地鎮祭が行なわれた。現在の教養部図書室は、三高時代からの古い木造建築であることと、約5,000名の学生数に対して約200席の閲覧室という小さなもので、十分なサービス体制もとれず新館の建築が望まれていた。新館は、地上2階地下1階、総面積4,320m<sup>2</sup>の大きなもので、席数も現在より2.5倍の約500席となるほか、視聴覚室、新聞閲覧室なども設けられ、47年度末に完成の予定である。附属図書館、医学図書館について第3番目の独立の図書館となるが、こんごの活動が大いに期待される。

## —— 大学図書館界のうごき

### 京都図書館協会大学部会の事業計画決まる

京都図書館協会は47年度より、一時その活動を凍結することになったが、大学図書館部会は、研究集会を中心にして、活動が続けることにし、本館がそのお世話を引受けることになった。9月12日の委員会で、次の通り、本年度の研究集会の予定が決定した。多くの方の参加を期待したい。

#### (1) 書誌学研究集会

期 日	報 告 者	テ ー マ	会 場
10月7日(土)	高橋正隆氏	日本金石文について	大谷大図
11月25日(土)	伊藤祐昭氏	奈良絵本について	京大図
2月17日(土)	河本昭氏	図入本と考古図録類について	京都芸大図

#### (2) 図書館学研究集会

12月9日(土)	金井孝氏	雑誌の整理運用について	京大図
1月20日(土)	小国健一氏	漢籍目録について	京大図

時間はいずれも土曜午後1時半からです。

## プリンストン大学出版部 寄託図書目録 第6回～8回まで (その2)

前号につづいて寄託図書をご紹介します。書名の最後の丸括弧で囲まれた記号は、請求記号です。利用したいときは、本館の閲覧貸付掛カウンター（2階）に請求してください。

### V History

Barnett, A. Doak. : China after Mao.  
With selected documents. 1967.  
(5-7, B, 8)

Case, Margaret H.: South Asian history,  
1750-1950 : A guide to periodicals,  
dissertations, and newspapers. 1968.  
(5-4, C, 3)

Landen, Robert Geran: Oman since 1856:  
Disruptive modernization in a tradi-  
tional Arab society. 1967. (5-8, L, 2)

Mochulsky, Konstantin: Dostoevsky: His  
life and work. 1967. (5-3, M, 40)

Frye, Roland Mushat : Shakespeare's  
life and times: A pictorial record.  
1967. (5-3, F, 18)

Spaulding, Robert M. : Imperial Japan's  
higher civil service examination. 1967.  
(5-6, S, 32)

Tignor, Robert L. : Modernization and  
British Colonial Rule in Egypt, 1882-  
1914. 1966. (5-9, T, 5)

### VI European history

Avrich, Paul.: The Russian anarchists.  
1967. (6-7, A, 11)

Green, Constance McLaughlin : The  
Secret city. A history of race rela-  
tions in the nation's capital. 1967.  
(6-8, G, 17)

Jones, Peter d'A. : The Christian socia-  
list revival, 1877-1944: Religion, class,  
and social conscience in late Victorian  
Britain. 1967. (6-4, J, 2)

Michels, Agnes Kirsopp : The calendar  
of the Roman Republic. 1967.  
(6-0, M, 16)

Paret, Peter : Yorck and the era of

Prussian reform, 1807-1815. 1966.  
(6-6, P, 3)

Thompson, John M. : Russia, Bolshe-  
vism, and the Versailles peace. 1966.  
(6-3, T, 4)

### VII Sciences

Graham, Loren R. : The Soviet Acad-  
emy of Sciences and the Communist  
Party, 1927-1932. 1967. (7-0, G, 14)

Gunning, R. C. : Lectures on Riemann  
Surfaces. 1966. (7-1, G, 8)

MacArthur, Robert & Wilson, Edward  
O. : The theory of Island biogeogra-  
phy: Monographs in population bio-  
logy, 1. 1967. (7-6, M, 66)

### VIII Arts & Industries

Egbert, Virginia Wyle. : The mediaeval  
artist at work. 1967. (8-1, E, 23)

Greiff, Constance & Gibbons, Mary &  
Menzies, Elizabeth. : Princeton archi-  
tecture: A pictorial history. 1967.  
(8-1, G, 39)

Kolkowicz, Roman. : The Soviet mili-  
tary and the Communist Party. 1967.  
(8-8, K, 4)

Peps, John W. : Monumental Washing-  
ton, The planning and development  
of the capital center. 1967.  
(8-1, R, 50)

Rosenberg, Jakob. : On quality in art:  
Criteria of excellence, past and pre-  
sent. The A. W. Mellon lectures in  
the fine arts, 1964. 1967. (8-1, R, 52)

Rosenblum, Robert. : Transformations  
in Late Eighteenth Century Art. 1967.  
(8-1, R, 51)

## —特集— 閲覧室の現状と問題点 (その4)

### 理 学 部

理学部には学部図書室は設置されていない。しかし、9つの学科図書室(附属施設の図書室を除く)が設けられている。

9つの学科図書室名と閲覧席数は、数学科32席、物理学科60席、宇宙物理学科6席、地球物理学科8席、化学科20席、動物学科10席、植物学科6席、地質学・鉱物学科20席、生物物理学科20席、合計182席となっている。昭和42年度大学図書館実態調査では、理学部総計120席であるから5年間に50%の増である。これを各図書室別にみると、42年当時に閲覧席を設けていなかった数学、宇宙物理学、地球物理学科の3図書室は、あらたに設けられ、生物物理学科は学科新設(昭和43年)による増加である。この増加はここ数年の間に、それも大学紛争のあとに増設されているのが特徴である。しかし化学科は40席から20席に減少している。その理由は、図書の増加によって閲覧席数を減らさざるをえなくなったためである。席数が増加した学科図書室も、研究室の一部をさいて閲覧席を設けたところ(植物学科)、また、物置を改造して設けたところ(数学科)があり、動物学科では書庫を改造して収容スペースを広げ、図書の一部を移転してそのあとに席を設けるなど、各学科ともなみなみならぬ努力のあとがみられた。地質学・鉱物学科および物理学科(物理学第1、第2の共有)は新築による増加である。しかし、どの図書室も書庫のスペースは狭く、いずれ年々増加する図書を収容しきれなくなるであろう。その場合、化学科のように、書庫スペースが閲覧スペースに割込むことが考えられるから、今以上に席数が増えることは考えられそうにない。

理学部の学生数(昭和47年5月1日現在)は、大学院生582名、学部学生(教養課程を除く)746名である。大学院生は研究室内に専用机を持っているから、学部学生数746名に対する席数比は約25%であるからまずまずであろう。

一方、大学紛争後に、理学部では学科の管理による「学生控室」が16カ所、約300席が設置されて学生の交流の場を提供している。この「学生控室」が読書の間となっているかどうか明らかでない。しかし、そのために図書室の利用、それも自習用の席利用が減少していることは事実のようである。図書室は面積が狭く、職員も1名から3名までという職員数であるために、閲覧部門と書庫の管理、それに整理業務も行なわなければならない現状では、閲覧室だけが独立して、読書施設としての十分な機能(静かで、快適な条件)を保つことは非常に難しい。

理学部のなかで比較的設備が整ったところの物理学および生物物理学図書室は、閲覧机に仕切りを設け、冷暖房も完備しているためか、利用が集中している傾向がある。そこには、他学部学生も閲覧席だけの利用にきている例もあることから、単に席だけを設ければいいというだけではすまないことを教える具体例といえよう。以上のことから、学科図書室の組織、運営、あり方などについて多くの問題点を含んでいるように考えられる。最後に、物理学図書室の方にまとめてもらったのを紹介しておこう。(編集委員)

### 物 理 学 図 書 室

物理学図書室は、京大構内北端の5階だてビルディングの4階に位置し、明るく、窓外の眺めがよいことが一つの特徴である。閲覧室は、面積168m<sup>2</sup>、座席は新着雑誌室として仕切られたソファのコーナーも含めて全部で60、理学部の中ではもっとも大きい閲覧室である。閲覧用机には個別の照明をそなえ、冷暖房設備があり、とくに夏期には満席になることも多い。蔵書は自由に書庫内で見ることのできる開架式であり、気軽に出入できる雰囲気もあって、連日、利用者は非常に多い。図書室の主な利用対象者としては、物理学第1・第2の両教室に所属する院生・教官約300名と考えることができるが、学部学生の利用も多く、その数は、とくに近年理学部において教室を単位とする分属制度が否定されて以来、著しく増加してきた状態である。自習のための閲覧室の利用一つをとってみても、入りやすい2～3の教室図書室に片よっていく傾向もあって、ぜひとも理学部学生を対象とした学生用図書館あるいは閲覧室の確立が望まれる。



### 東南アジア研究センター図書室

鴨川沿いの旧京都織物工場の建物に、昨年8月13日に移転した。東南アジア研究センターは、はじめ現地における調査・研究活動が中心で、図書資料の充実に余り重点がおかれていなかった。3年前から、図書資料の整理と充実に力を注いでいる。図書室は、主としてセンターの教官およびセンター研究参加者の研究に利用されている。閲覧室兼事務室と書庫の2部屋で、蔵書数は約5,600冊、そのうち半数近くが東南アジア地域関係の本であるが、それと平行して人類学、経済発展論などの専門書の収集にも努力している。タイ語やインドネシア語などの現地語文献の充実に努めているが、まだ未整理の段階である。

購入雑誌は、和洋合せて86種類、その他に国内・国外の諸団体との図書交換を通じて幅広い分野の雑誌を入手している。特に東南アジア地域に関する雑誌には貴重なものが多い。地図については、1万枚を越える東南アジア各地域の地図を有し、目下、その整理と目録作りの段階である。山積みになっている未整理本の中にあつてあんな風にもしたい、こんな風にもしたいと考えるとき、気が遠くなりそうな日日である。

あとがき：数日前、本館2階の閲覧室窓口に松葉杖の学生を見かけた。本館の階段は一段一段が高く、しかも急角度であるため、ご本人が階段を上ってくるのはたいへんだったろう、と気の毒にかんじた。実はそれと同じようすを、本年3月の入試のときに見たことがある。松葉杖をついた一人の受験者が、友人に荷物を持って貰いながら、うしろ向きに一段一段づつ階段を上っているようすをみて、ふと考えさせられた。

◇いまの大学施設は、身障者のことを考慮にいれて設計がなされているだろうか。否であろう。図書館もその例にもれない。公共図書館でも考慮されているところがどれだけあるだろうか。身障者の人数がほんの一握りであるからといって切捨てられない問題であるように思われるが、どうであろうか。（武内）

### 大型計算機センター図書資料室

当室は、大型計算機センターの3階、吉田山が迫って見えるところにある。昭和44年にセンターが発足して以来4年目の小さな図書室だが、図書資料室という名称が示すように、単に図書や雑誌の収集だけではなく、計算機にまつわる雑多な資料（計算機のマニュアル、本センターに登録されたサブルーチン・ライブラリー等々）を保管する役割も持っている。そして、センターが大型計算機の全国共同利用の名のもとに運営されているように、当室も大型計算機の全国の利用者に開放されており利用者の所属分布はひろい。

現在は2名で業務を行なっているが、当センターの広報やその他の資料の編集事務も仕事のひとつであり、なかなか図書業務に専心できないのが悩みである。センター自体のスペース不足のため、冬期には、プログラムのデバッグをする利用者の控室のようになる。計算センターというあわただしい、人の出入りのはげしいところで、いかに図書室としての静寂を保っていくかが大きな問題となる。今年になってマットを敷き、ブラウジング・コーナーらしきものを設けたので大分改善されたが、やはり掛員が注意しなければ、図書室らしい雰囲気を保てないのが実情である。このように、いかにも原始的な悩みばかりを抱えているが、今後とも研修などに参加していきたいと思っている。なお、蔵書数は現在399冊、外国雑誌50種、国内雑誌15種である。